



いのちのひびきに耳をすます紙芝居

ちっちゃいこえ

脚本 アーサー・ビナード 絵 丸木 俊・丸木位里「原爆の図」より

どんな生き物でも、体の中にはちっちゃい声をかかえていて

ひたすらいのちをつくりつづける。

ヒロシマの生き物たちには何がふりかかったのか？

わたしたちはどうすれば生きていけるのか？

美しい絵から、ひびいてくるそのこたえに

ひとりひとり、耳をすます紙芝居。

2019年
5/20
刊行予定

ISBN 978-4-494-08084-7 / NDC 319.8 / 定価 2,916 円 (本体 2,700 円 + 税) / 26.5 × 38.2 cm / 16 場面 / 2019 年 5 月刊行

デザイン: 谷口広樹 協力: 原爆の図 丸木美術館 / 有限会社流々

童心社

どこにでもありそうで、なかった紙芝居

ぼくの紙芝居の初体験は遅い。23歳になってからだ。来日して、近所の池袋図書館の児童書コーナーに入り浸って絵本を読んでいた。スタッフと親しくなって、ある日「おはなしたんぼぼ」という催しに参加させてもらえた。テーブルの上に木の箱が置かれ、不思議に思ったら扉が開き、舞台に変身した。昔話の世界にぼくは吸いこまれて夢中になった。

どこにでもありそうな紙芝居。でもアメリカにはなく、出合わずに育ったぼくは、無謀なことを考え始めた。「いつか作ってみたい……」

何年もたって、やっと紙芝居の創作にとりくんだときも、ぼくはまた無謀なことを考えていた。丸木俊さんと丸木位里さんが作りあげた大連作「原爆の図」をもとにして、絵を切りとってストーリーをつむいでみよう……。

「原爆の図」の前に立つと、だれでもどんどんまきこまれて、追体験することになる。丸木夫妻は遠くから眺めるのではなく、ピカにさらされた生き物に寄りそって描き出している。

美術作品としてのその力学が、まさに紙芝居と共通していると、ぼくは思った。観客たちをまきこむ装置として、「原爆の図」も、紙芝居もはたらくのだ。

それから7年間、どこにでもありそうで、どこにもない紙芝居をさがし、ピカの体験者に耳をかたむけつづけた。いのちの源であるサイボウにも耳をすまして、「ちっちゃい こえ」が形になった。さあ、これからひとりひとりの中の声と、どのようにひびき合って広がるのか。

アーサー・ビナード

アーサー・ビナード

Arthur Binard

詩人。1967年、米国ミシガン州生まれ。ニューヨーク州の大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での創作を始める。『ここが家だ——ベン・シャーンの第五福竜丸』（集英社）で日本絵本賞、『さがしています』（童心社）で講談社出版文化賞絵本賞、広島文化賞受賞。

丸木 俊 まるき とし

油彩画家。1912年、北海道生まれ。旧姓・赤松。女子美術専門学校で油絵を学び、二科展に出品する。戦前はモスクワとミクロネシアに長期滞在し、スケッチに打ち込む。1941年に位里と結婚。創作絵本や紙芝居、昔話の再話など幅広い分野の児童文学を手がける。2000年、87歳で永眠。

丸木位里 まるき りり

水墨画家。1901年、広島県生まれ。日本画を田中頼璋から、のちに川端龍子らから学ぶ。日本画に抽象的表現を取り込み、独自の画風を打ち立てる。戦前は歴程美術協会、美術文化協会などで活躍。戦後は現代日本美術展などで、雄大かつ繊細な水墨画を発表し続ける。1995年、94歳で永眠。

原爆の図 第10部「署名」の前で紙芝居を演じる作者



すべての人をまきこむ紙芝居へ —制作の7年

絵はどこから？



原爆の図 第12部『とうろう流し』の中から紙芝居15場面の猫を選んだ。



丸木位里さんと俊さんが、原爆投下の直後に広島へ入った。そこで目のあたりにした光景と、体験者の証言をもとに作った「原爆の図」は、第1部の「幽霊」(1950年)から第15部の「長崎」(1982年)までの連作が含まれる。それぞれの作品の大きさは、どれも縦1.8メートル、横7.2メートルであり、^{よんきょくいつそう}四曲一雙の屏風絵の形をとっている。

今回の紙芝居では、その壮大な「原爆の図」から絵を選んで切りとり、さらに工夫をこらして構成した。演じ手が1枚の場面をぬくと、次の場面が瞬時に観客に届くという、紙芝居のビジュアル効果を高めるために、さまざまな実験を重ねた。

今回の紙芝居では、その壮大な「原爆の図」から絵を選んで切りとり、さらに工夫をこらして構成した。演じ手が1枚の場面をぬくと、次の場面が瞬時に観客に届くという、紙芝居のビジュアル効果を高めるために、さまざまな実験を重ねた。

例えば、15場面の絵は、「原爆の図」の第12部『とうろう流し』の中から見つけ出し、反転させて、背景も同じ絵の別の場所からとり、合体させている。

脚本ができるまで

16場面の脚本(完成形)



16場面の脚本(推敲中)

2012年から紙芝居を作り始め、1年やって、2年やって、3年やってみても脚本は完成しない。ストーリーは深まってくけれど、どうも何か欠如している。「いったいなにが足りないのか?」と、ぼくは先人たちの紙芝居をいろいろ読み直して、気がついた。

「紙芝居ってメチャクチャだ!」

成功している作品は、常識から大胆にはみ出して、飛躍が観客をひきつけている。絵本よりも演出上の「メチャクチャ」、あるいは「型破り」の要素が必要だと、そのとき悟った。紙芝居独特の「メチャクチャ」を見つけて、それから全国津々浦々、たくさんの人びとに観客になっていただき、また演じ手にもなっていて、発見の連続の中で脚本ができてきた。

たぶん、生き物の体のサイボウそのものが語り出して、主人公を買って出たとき、やっと「型破り」の域に達した気がする。

アーサー・ピナード



原爆の図 第2部「火」

『ちっちゃい こえ』刊行に寄せて

原爆の図 丸木美術館学芸員

岡村幸宣

「原爆の図」と紙芝居を結びつける発想は突飛ではない。「原爆の図」は語りと共にある絵だ。しかしアーサーさんは、絵を切りとり、反転させ、色を変えるという曲芸に挑んだ。絵と紙芝居は違う。物語を編みなおすだけでなく、絵そのものも再構成する必要があった。そんなことが許されるのか? しかし詩人は宙返りをするものだ。どうせなら未踏の荒野まで跳んでほしい。それは原爆をミクロの視点で見つめ、「原爆の図」の構造を再発見する試みでもあった。果たして詩人は着地する。今夜ここでのひとさかり。それでは皆さま、お立ち会い。



原爆の図 丸木美術館
〒355-0076 埼玉県東松山市下唐子1401
TEL 0493-22-3266